九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

玉泉館旧蔵資料の研究 : 福岡県みやま市下楠田貝塚出土の土器資料について

福永, 将大
九州大学埋蔵文化財調査室

https://doi.org/10.15017/4774257

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告. 19, pp.17-26, 2022-03-31. The Kyushu University Museum
バージョン：
権利関係：

九州大学総合研究博物館研究報告第19号
Bulletin of the Kyushu University Museum
No.19, 2022, pp.17-26

玉泉館旧蔵資料の研究
── 福岡県みやま市下楠田貝塚出土の土器資料について ──

福永　将大

九州大学埋蔵文化財調査室：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

要旨：九州大学総合研究博物館に所蔵されている玉泉館旧蔵資料のうち，福岡県みやま市下楠田に所在する下楠田貝塚から出土した土器資料について報告した．当該土器資料から読み取った考古学的情報をもとに，下楠田貝塚における人々の活動時期や，そこでの居住・生業活動について，縄文時代における気候変動などとの関係に注視しながら，若干の考察を試みた．

キーワード：玉泉館旧蔵資料，資料報告，下楠田貝塚，土器，縄文時代

１．はじめに

九州大学総合研究博物館に収蔵されている玉泉館旧蔵資料は，旧制福岡高等学校教授の玉泉大梁氏が収集した資料を基礎とする資料群である[1]．データベースに登録されている資料は5,216件にも及び，資料目録の作成・公開（九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座1996），さらに，2021年からオンラインで当該資料データベースが公開されたことによって[2]，資料概要の把握が可能となっている．

玉泉館旧蔵資料は，縄文時代から近現代にまで及ぶ実に多種多様な資料から構成されている．これら資料の一部に関しては，既に論文や著作の中で紹介・報告されているものもあるが，資料の大部分は，詳細が未報告のままである．

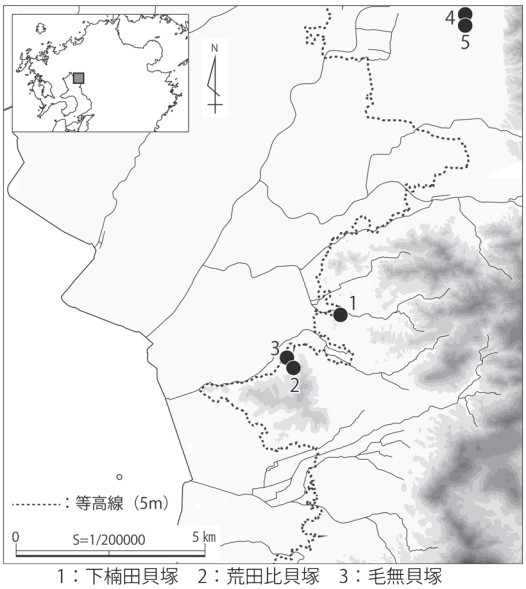
1994年，九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座によって，玉泉館旧蔵資料の再整理・報告作業が開始され，当該資料群のうち，九州縄文時代土器・石器資料と関東縄文時代資料の一部が報告されている（九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座1996・1997・1999）．この取り組みは継続され，残りの未報告縄文時代資料をはじめとして，新しい時代の資料についても再整理・報告作業が計画されていたようである．こうした先学の意志を引き継ぎつつ，玉泉館旧蔵資料という学術的・学史的に大変貴重な資料群を調査・研究し，その成果を報告することは，後学に残された課題といえよう[3]．

こうした問題意識のもと，本稿では，基層構造講座による九州縄文時代資料の報告（九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座1996）で洩れていた，福岡県みやま市所在の下楠田貝塚出土土器資料の報告を行う．本資料の報告によって，玉泉館旧蔵資料の九州縄文時代資料は全て報告されたことになる．

２．下楠田貝塚について

下楠田貝塚は，福岡県みやま市下楠田に所在しており（第１図），学史上では二川村貝塚や二川貝塚，老齢貝塚などと呼称されてきた．東方約1.5㎞には国指定史跡である石人山古墳が位置しており，この古墳の調査に訪れていた研究者などによって，下楠田貝塚の存在は古くから認識されていたようである（柴田1916）．

下楠田貝塚に関する調査・研究史を紐解いていくと，1917年の中山平次郎氏による研究まで遡ることができる（中山1917）．中山氏は，下楠田貝塚で表採した土器資料を検討した結果，貝塚土器・弥生式土器・それらの中間



1：下楠田貝塚　2：荒田比貝塚　3：毛無貝塚
4：坂田中園遺跡　5：権現塚北遺跡

第１図　下楠田貝塚とその周辺の遺跡

物というべきものの三種類の土器が混在しているとし，当該地域が，貝塚土器を特徴とする南方系と弥生式に属する北方系の両民族の接触・交渉の地であると解釈した．さらに，これら土器の検討から見出した所見と，邪馬台国や熊襲征討，磐井の乱といった歴史的出来事とを絡めながら，列島における「アイヌ」民族と大和民族の人種問題にまで議論を発展させている．

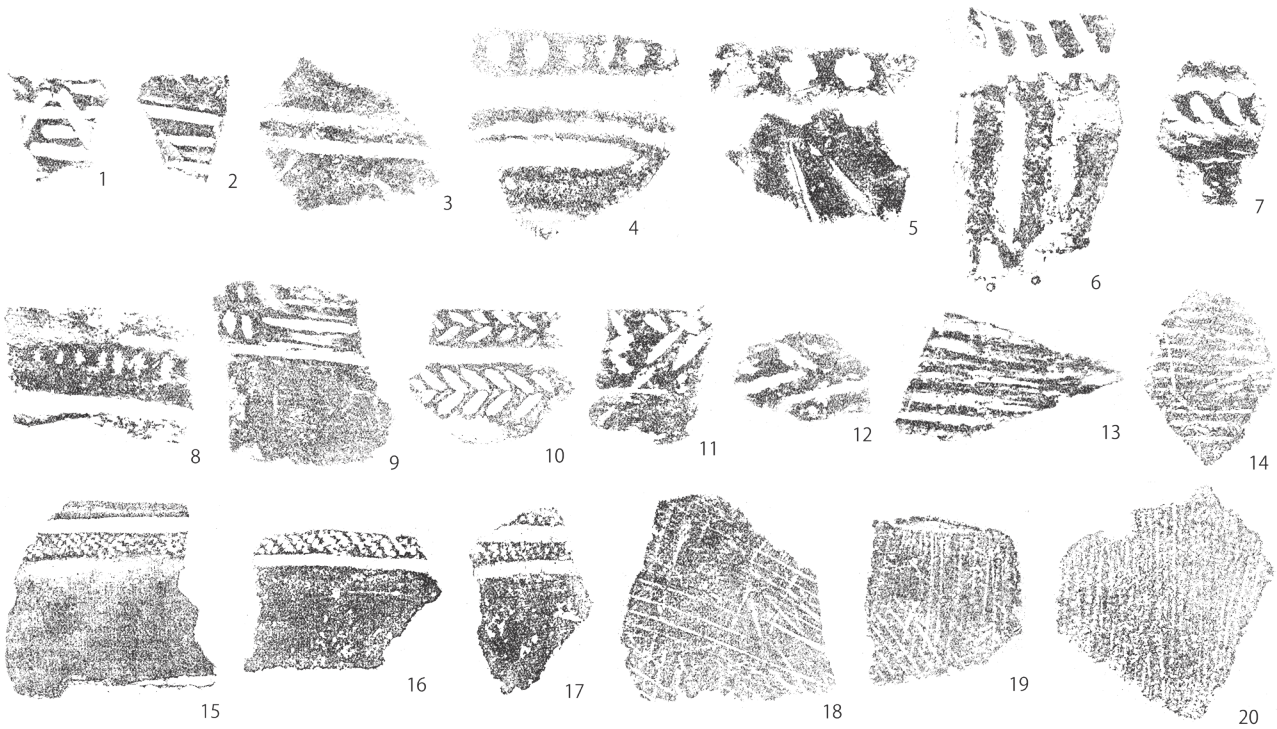
なお，中山氏によって提示された下楠田貝塚出土土器の拓影（第２図）を今日的視点で見ると，縄文時代前期の曽畑式，同中期の阿高式，同後期の御手洗式・小池原上層式・北久根山式と考えられる土器で，弥生土器と明言できる資料はない．

清野謙次氏は，1920年12月と1922年３月に下楠田貝塚の発掘調査を実施した．目的は人骨の発掘調査・研究である（清野1969）．

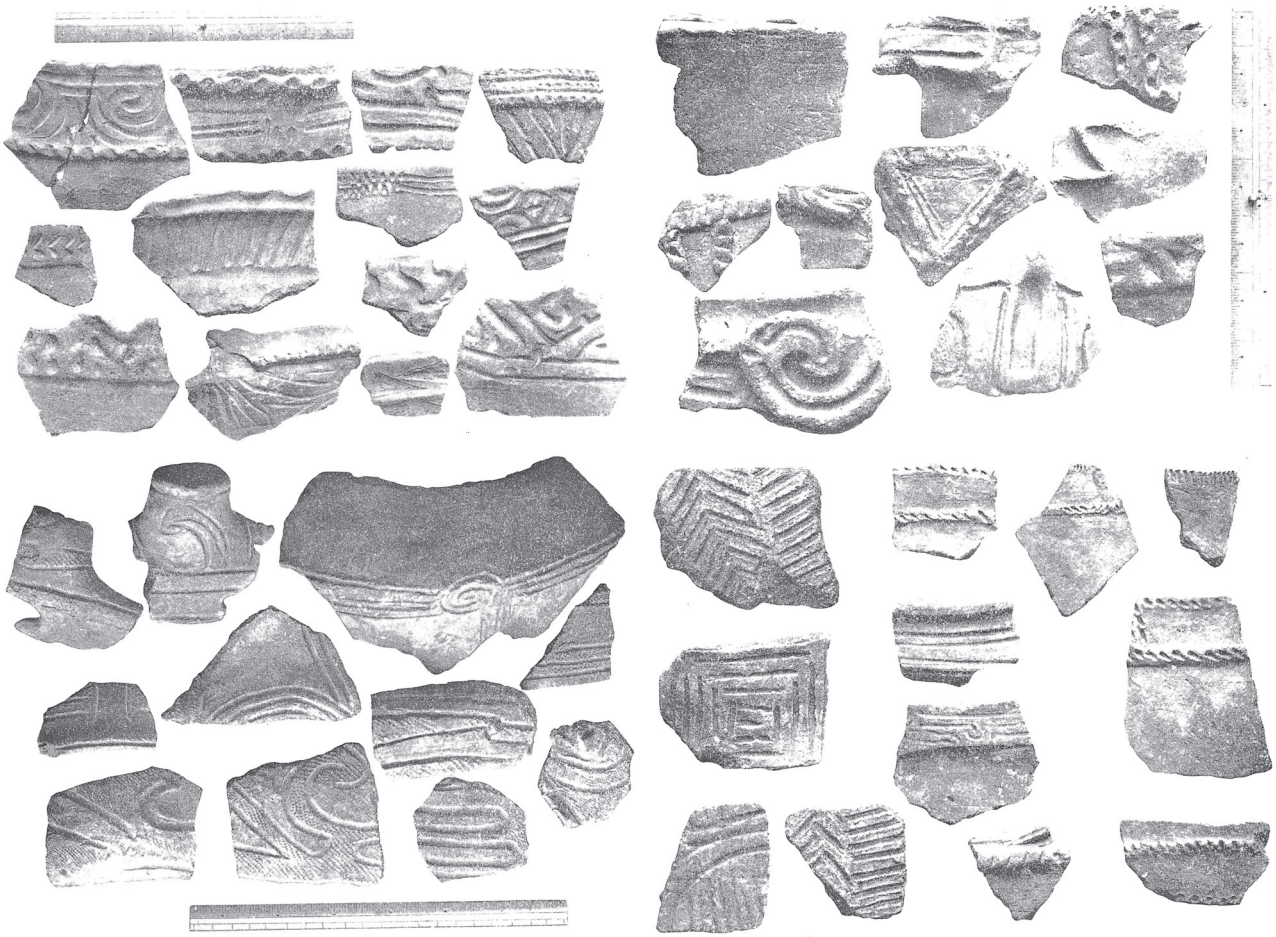
この発掘の15年前に，貝殻を採って焼石灰を製したため，貝層の大部分が廃滅したこと，さらにその後，畑地を段畠にしたことで，残りの貝層も多くが消滅してしまったことが記されている．そのため，貝塚の大部分は後世の攪乱を受けており，縄文土器と弥生土器が混在してあらわれていることから，「常に表面採集のみを行って発掘しない性癖だった中山平次郎氏がこの事実を目して弥生土器使用人種と縄紋土器使用人種との接触と考えたのはその当を得ていない」（清野1969，pp.22）と，中山氏を痛烈に批判している．

貝塚と黒色有機土層が僅かに残っていて，その部分から不完全人骨５体，散乱人骨２体の計７体の人骨が出土している．

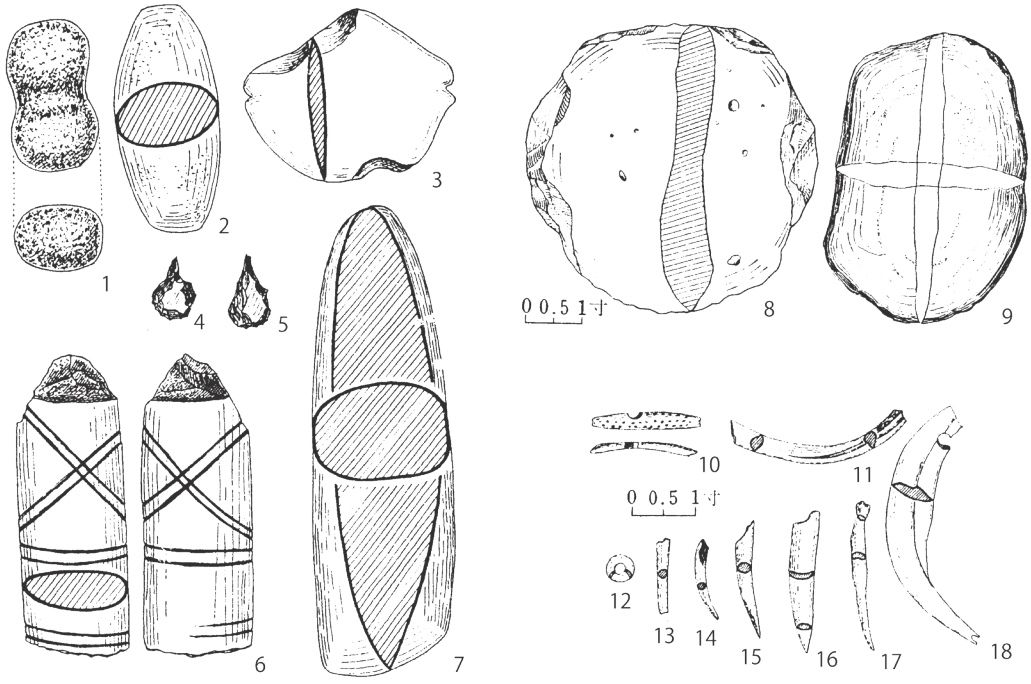
清野氏は出土土器について文様を基準とした分類を行った．その結果，阿高式の太線凹紋：35%，磨消縄文



第２図　中山平次郎氏が示した下楠田貝塚出土土器（中山1917より転載，一部改変）



第３図　清野謙次氏が示した下楠田貝塚出土土器（清野1969より転載，一部改変）



第４図　清野謙次氏が示した下楠田貝塚出土石器（清野1969より転載，一部改変）

土器片：25％，厚手傾向の著しい突帯紋ある土器片：20％，曾畑式細線刻紋：５％，弥生式土器：５％，という出土比率が提示されている[4]．清野氏は，阿高式紋様が細くなって曾畑式紋様になるという想定のもと，下楠田貝塚では曾畑式紋様よりも阿高式紋様の出土量が多いことから，下楠田貝塚は熊本県所在の曾畑貝塚よりも古い年代に位置づけられると考えた．

第３図を見ると，曽畑式・阿高式・出水式・御手洗Ａ式・中津式・福田Ｋ2式と考えられる土器が出土している．なお，現在では曽畑式は縄文時代前期，阿高式は縄文時代中期に位置づけられ，前者は後者よりも古いことが確実であるため，清野氏の遺跡所属時期に関する考察は再検討が必要である．

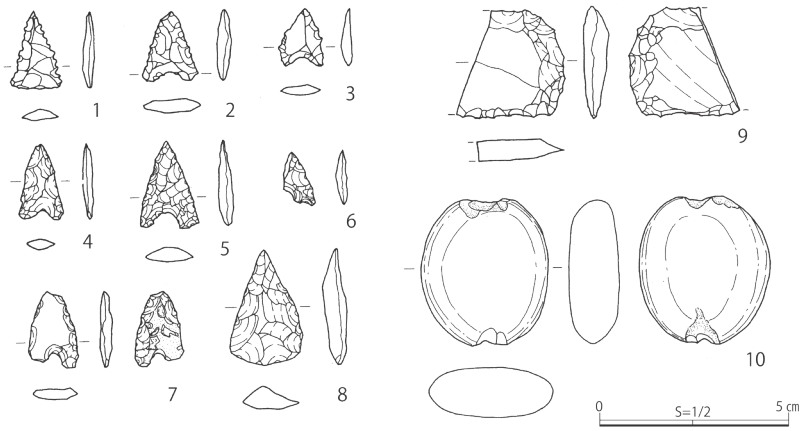
石器は，石鏃・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・石皿・砥石・石錘・石棒の出土が報告されている（第４図）．中でも石棒と報告されているものは目を引く（第４図６）．これは石刀と呼ぶべき資料であり，断面楕円形を呈し，二本単位で線刻がなされている．「現存部の長さ3.6寸，幅1.3寸，厚さ0.5寸」（清野1969，pp.26）という記述から，小型品と判断できる．これらの形態的・装飾的特徴から，縄文時代後期後半～晩期前半にかけて製作された可能性が高いが，後述の出土土器の検討から，下楠田貝塚の時期は縄文時代前期～後期前半と考えられ，時期的にうまく整合しない．当該資料に関しては，今後さらなる検討が必要であろう．

清野氏の発掘調査後，1939年に鏡山猛氏によって発掘調査がなされたという記述がみられるが（久賀1970），その調査の詳細については不明である．九州大学考古学研究室に，下楠田貝塚出土資料が所蔵されているが，これらの資料は，この鏡山氏の発掘調査で出土した遺物の可能性が高い．なお，九州大学考古学研究室所蔵の下楠田貝塚出土土器に関しては，田中良之氏によって，その一部（出水式土器）が報告されている（田中1982）．

以上，下楠田貝塚に関する調査・研究史を概観してきた．下楠田貝塚は，大正時代から調査・研究の対象とされてきた遺跡であり，その学史的重要性を改めて確認することができた．中山平次郎氏・清野謙次氏によって公表された出土土器の拓影・写真を参照すると，下楠田貝塚は縄文時代前期～後期前半に存在していた貝塚だと考えられるが，出土遺構・遺物に関する情報が限られており，遺跡の性格を追究することは現状では難しい．後世の攪乱によって遺跡が破壊されており，今後の発掘調査によって新資料の獲得も困難であることが予測される．その意味でも，玉泉館旧蔵の下楠田貝塚出土資料の報告は極めて意義深いことと言えよう．

３．玉泉館旧蔵の下楠田貝塚出土資料

玉泉館旧蔵の下楠田貝塚出土資料は，土器７点と石器10点である．そのうち石器資料に関しては既に報告されている（第５図）（九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座1997）．第５図９は，1996年に公表された資料目録では「石刀」とされているが（九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座1996，p.51，番号：213），1997年の報告では「石匙もしくはスクレイパー」とされ



第５図　玉泉館旧蔵の下楠田貝塚出土石器
（九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座1997より転載，一部改変）

ている（九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座1997，p.57）．９の形態的特徴を見る限り，小片のため器種の特定は困難であるが，スクレイパーあるいは横刃形石器の可能性が想起され，少なくとも石刀とは言い難い[5]．1996年の資料目録の記載を訂正する必要があろう．

なお，第５図１～９は中山平次郎氏の採集品で発見日は不明，10の採集者は玉泉大梁氏で，発見日は「昭和４年７月12日」と記載されている．

これまで未報告であった下楠田遺跡出土土器資料７点が第６図である．１・３～７は玉泉大梁氏の採集品で，先ほどの石器資料と同じ「昭和４年７月12日」が発見日と記載されている．２は，寄贈者「鏡山猛」で，発見日は「昭和３年８月」となっている．1939年（昭和14年）に鏡山猛氏によって下楠田貝塚の発掘調査がなされたとされているが（久賀1970），当該資料の発見日とは合わない．

１は，轟式の深鉢口縁部片である．器面の摩耗・磨滅が著しく，口縁部も一部破損している．口縁部は平縁と考えられ，口縁部に平行して断面三角形の隆帯が数条施されている．

２・３は，小片のため器種認定や時期比定が困難である．２は内湾気味に立ち上がる口縁部片で，口唇部外面には，左上から右下に押し引くように刺突列が施されている．内外面ともに撫で調整．３も内湾気味に立ち上がる口縁部片で，口唇部は撫でて面取りされている．外面には幅５㎜弱の沈線が左下がりで３条施されているが，文様モチーフは不明である．

４は，深鉢の口縁部片で，中津式新相あるいは福田K2式に属すると考えられる．尖り気味の波状口縁で，口縁部と頸部の境界に段を設けて，口縁部文様帯を創出している．口縁部外面には三角形をモチーフとした入組文が施されており，沈線幅は約２㎜と狭い．外面に赤色顔料が塗られている．外面は磨き調整，内面も粗い磨き調整が施される．

５は，深鉢の口縁部片である．波状口縁で，波頂部外面に縦位の棒状隆帯が施される．波頂部の口唇部上面には，粘土紐による入組状の装飾が付く．内外面ともに押引きによる刺突が多数施されており，内面は刺突列で逆三角形モチーフを描いている．形態的・装飾的特徴などから，御手洗Ａ式に属すると考えられるが，縄文時代中期の船元式・春日式である可能性も捨てきれない．

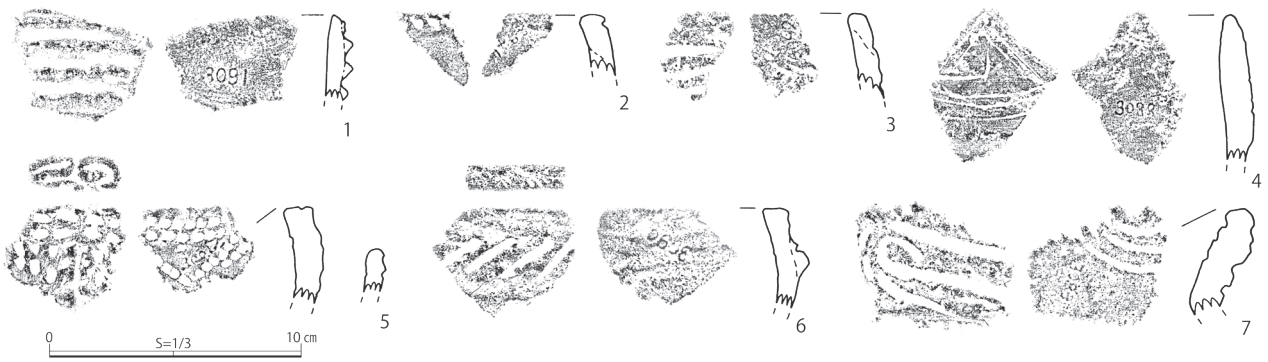
６は，平縁をなす口縁部片で，口縁の下に刻目を施した突帯がめぐる．口唇部は肥厚し，上面を面取りして刻み目を施す．出水式か御手洗Ａ式かの判断は難しいが，いずれにしても縄文時代後期前葉の土器であることは間違いなかろう．

７は，鉢の口縁部片である．波状口縁をなし，口縁に沿う形で数条の沈線が配され，波頂部には入組文を描く．口縁部内面にも文様を有し，波頂部を中心に弧線を３条施文する．鐘崎式最新相に比定され，「Ｉａ式段階」（福永2016），「鐘崎式中村石丸段階」（林2020）に該当する．

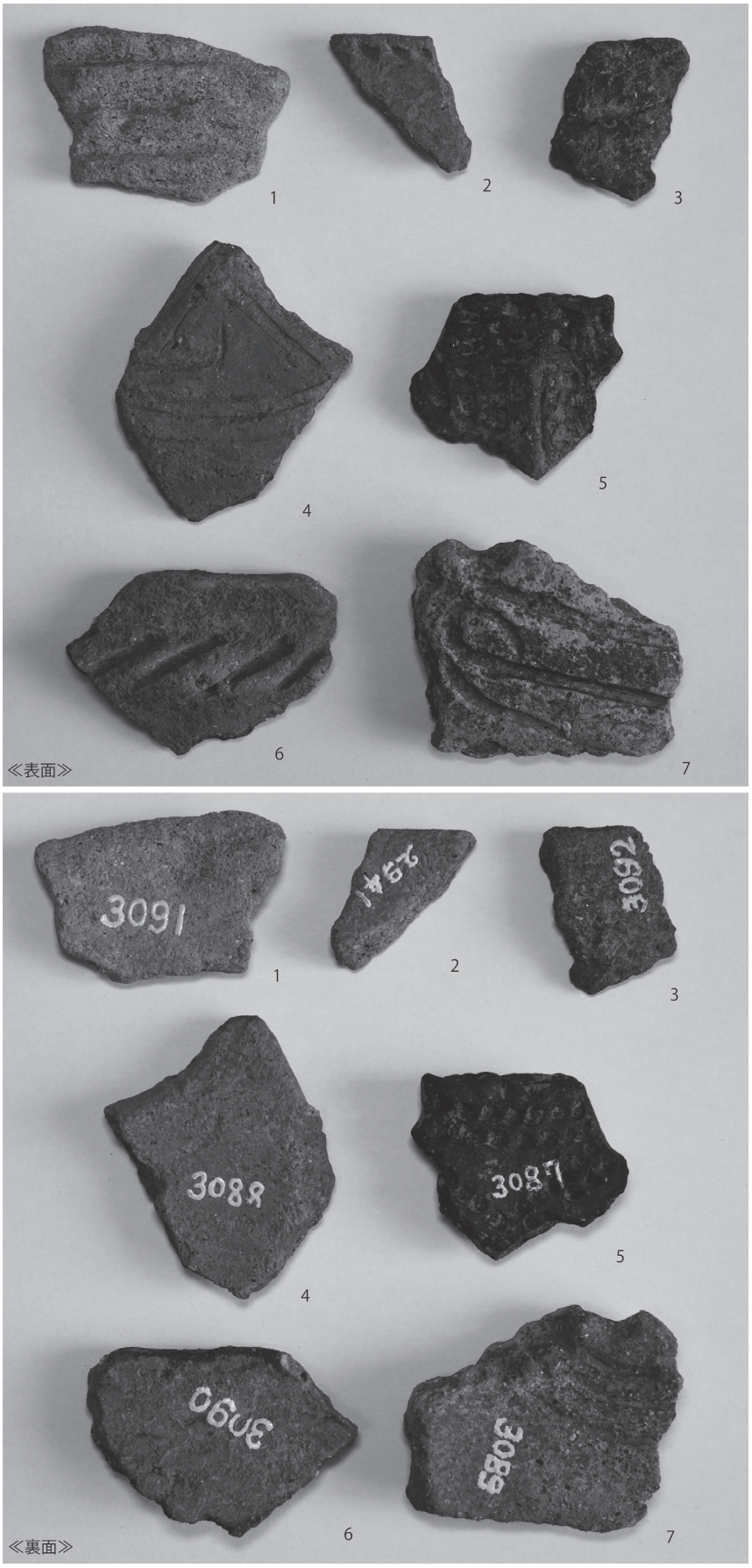
４．若干の考察

（１）玉泉館旧蔵の下楠田貝塚出土土器

玉泉館旧蔵の下楠田貝塚出土土器は，縄文時代前期が１点あって，その他は全て縄文時代後期前半に属する土器であると考えられる．先述したように，中山平次郎氏・清野謙次氏によって示されている下楠田貝塚出土土器も，縄文時代前期～後期前半期に属する資料であるので，玉泉館旧蔵資料とその傾向は概ね一致する．しかし以下のような差異も認められる．



第６図　玉泉館旧蔵の下楠田貝塚出土土器（筆者実測・拓本）



第７図　玉泉館旧蔵の下楠田貝塚出土土器（筆者撮影）

・中山・清野両氏の資料では，轟式は認められない
・玉泉館旧蔵資料では，曽畑式や阿高式，磨消縄文土器が認められない

玉泉館旧蔵資料第６図１の存在によって，それまで下楠田貝塚出土土器の上限は縄文時代前期後半の曽畑式だったのが，前期前半の轟Ｂ式期まで遡ることがわかった．また，土器から見る限り，縄文時代後期前半をもって当該貝塚では活動痕跡が認められなくなることも，玉泉館旧蔵資料によって追認することができる．

また，第６図７の資料は注目に値する．７は鐘崎式最新相に位置づけられる土器であることは上述の通りである．そもそも鐘崎式最新相は東北部九州に分布の偏りが見られる土器であり，同時期の西部九州には北久根山第１型式が分布していたと考えられる（福永2016）．下楠田貝塚が所在する南筑後は，後者に属する地域圏であり，現に中山氏が提示した土器の中に北久根山第１型式と考えられる土器が存在している（第２図10～12）．すなわち，現在の研究状況から言えば，下楠田貝塚出土土器において７の土器の出土は異質である言わざるを得ない．

７の土器が下楠田貝塚から出土しているとなると，

①東北部九州との人・モノ・情報の交流の結果，異系統土器として下楠田遺跡で製作，あるいは土器自体が持ち込まれた
②そもそも鐘崎式最新相と北久根山式第１型式は，現在認識されているような地域差・系統差を示すものではなく，時期差を示すものとして両者とも汎九州的に認められる

といった複数の仮説が成り立ち得る．現在の資料状況では，仮説①が支持されると考えられるが，玉泉館旧蔵資料の存在によって仮説②が浮上した以上，今後，鐘崎式の終焉について汎九州的視点から再検討する必要が出てきたと言えよう．

（２）下楠田貝塚の評価

下楠田貝塚の南西約２㎞には，福岡県大牟田市所在の荒田比貝塚がある（大牟田市教育委員会編1970）（第１図）．発掘調査の結果，墓坑と考えられるものを含むピット群が検出されているが，貝塚の大部分は後世に破壊されていたことが判明している．

荒田比貝塚からは，縄文時代中期の阿高式，後期前半の南福寺式・出水式・御手洗Ａ式・福田Ｋ2式土器が出土しており，地理的・時期的にも下楠田貝塚と密接な関係にあったことが指摘されている．

さて，第１図に標高５ｍの等高線を図示した．下楠田・荒田比両貝塚は，この等高線より少し上がったところに位置していることは興味深い．

縄文時代早期から気温の温暖化に伴って，海水準の上昇が急速に進み，縄文時代早期末～前期にかけてピークを迎えることが知られている．いわゆる「縄文海進」である．このピーク時には，貝塚の形成が活発になり，全国各地で貝塚文化が開花した（谷口2019）．

下山正一氏は，北部九州におけるボーリング調査による海成層の分布から，縄文海進ピーク時期（約6000～5000年前）の海成層上限高度は，玄界灘・響湾沿岸地域で＋0.4～4.5m，有明海沿岸地域で－1.9ｍと＋4.8ｍであるとした（下山1994）．また，長岡信治氏らは，ボーリング資料の解析（珪藻・硫黄分析，貝化石の放射性炭素年代測定）から，有明海南東岸玉名平野における完新世海水準変動について以下の点を明らかにしている（長岡ほか1997）．

・9000年前に約－20ｍ付近，4900年前には約２ｍで最高海水準に達し，海岸線は現在より約５㎞内陸に前進した
・4300年前には海退が始まっており，3500年前には約0.2ｍまで海面が下がり，その後現在の海水準に達した

第１表は，「遺跡発掘調査報告書放射性炭素年代測定データベース」[6]をもとに，九州縄文時代前期～後期の年代測定データを収集し，かつ，IntCal20で暦年較正を行った年代を一覧表にしたものである．海洋リザーバー効果や古木効果などを考慮していないため，あくまでも参考程度でしかないが，下山氏が海進ピークとする6000～5000年前は縄文前期～中期前半，長岡氏らが画期として指摘する4900年前は縄文時代中期前半，4300年前は縄文時代中期末，3500年前は縄文時代後期中葉に概ね相当する．

下楠田貝塚の時期は縄文時代前期～後期前半，荒田比貝塚は縄文時代中期～後期前半と考えられるので，ちょうど縄文海進がピークに達し，海退が進行し始めていた時期に該当する．標高５ｍの等高線より少し上がったところに立地しているのは，海進による海水準上昇に起因しており，海進によって生じた内湾を利用した居住・生業活動の結果，両貝塚が形成されたと考えられる[7]．

一方，海退がピークに達する縄文時代後期中葉以降の土器は両貝塚からほとんど見つかっておらず，当時の人々

第１表　九州縄文時代前期～後期の土器付着炭化物年代測定データー覧

時期	土器型式	calBP	遺跡名
早期末	轟2式	7,281	湯屋原遺跡
前期前半	轟B式	7,162	一陣長崎鼻遺跡
前期前半	轟B式	6,886	湯屋原遺跡
前期前半	轟B式	6,667	九郎遺跡
前期前半	轟B式	6,631	西畑瀬遺跡
前期前半	轟B式	6,447	三角山Ⅰ遺跡
前期前半	轟B式	6,200	西畑瀬遺跡
前期前半	轟B式	5,935	中川原遺跡
前期前半	轟B式	5,898	二日市洞穴
前期前半	轟B式	5,443	湯屋原遺跡
前期前半	轟B式	2,770	湯屋原遺跡
前期前半	轟4式	5,708	上伊良原榎遺跡
前期前半	轟5式	5,927	上伊良原榎遺跡
前期後半	曽畑式	6,791	向田遺跡
前期後半	曽畑式	5,987	一湊松山遺跡
前期後半	曽畑式	5,911	一湊松山遺跡
前期後半	曽畑式	5,747	一湊松山遺跡
前期後半	曽畑式	5,716	三角山Ⅰ遺跡
前期後半	曽畑式	5,462	桐木耳取遺跡
前期末～中期初頭	深浦式	5,461	中ノ原遺跡
前期末～中期初頭	深浦式	5,316	上水流遺跡
前期末～中期初頭	深浦式	5,282	宮ケ原遺跡
前期末～中期初頭	深浦式	5,035	堂園平遺跡
前期末～中期初頭	深浦式	4,869	仁田尾遺跡
前期末～中期初頭	深浦式	5,039	上水流遺跡
前期末～中期初頭	深浦式日木山	5,051	上水流遺跡
中期前半	船元Ⅱ式	5,326	北大久保A遺跡
中期前半	船元Ⅱ式	5,302	上水流遺跡
中期前半	船元式	5,461	上水流遺跡
中期前半	船元式	5,319	上水流遺跡
中期前半	船元式	5,310	上水流遺跡
中期前半	船元式	5,052	九郎遺跡
中期前半	船元式	5,049	上水流遺跡
中期前半	船元式	5,026	桐木耳取遺跡
中期前半	船元式	4,856	上水流遺跡
中期前半	本野タイプ	5,461	北大久保A遺跡
中期前半	上水流タイプ	5,160	北大久保A遺跡
中期前半	春日式	4,852	桐木耳取遺跡
中期前半	春日式	4,844	上水流遺跡
中期前半	春日式	4,799	上水流遺跡
中期前半	春日式	4,573	西畑瀬遺跡
中期前半	春日式	4,521	上水流遺跡
中期末	阿高式	4,462	中尾田遺跡
中期末	阿高式	4,289	南田代遺跡
中期末	阿高式	4,226	中尾田遺跡
後期前半	坂の下式	4,153	東畑瀬遺跡
後期前半	南福寺式	4,083	山ノ中遺跡
後期前半	岩崎式	4,232	宮ノ上遺跡
後期前半	岩崎式	4,150	宮ノ上遺跡
後期前半	岩崎式	4,143	宮ノ上遺跡
後期前半	指宿式	4,247	宮ノ上遺跡
後期前半	指宿式	4,086	山ノ中遺跡
後期前半	指宿式	4,086	山ノ中遺跡
後期前半	指宿式	4,083	山ノ中遺跡
後期前半	指宿式	3,985	芝原遺跡
後期前半	指宿式	3,830	山ノ中遺跡
後期前半	御手洗A式	4,418	中川原遺跡
後期前半	市来式	4,237	干迫遺跡
後期前半	市来式	3,902	下鶴遺跡
後期前半	市来式	3,846	干迫遺跡
後期前半	市来式	3,836	下鶴遺跡
後期前半	市来式	3,831	干迫遺跡
後期前半	丸尾式	4,149	干迫遺跡
後期前半	丸尾式	3,831	下鶴遺跡
後期前半	丸尾式	3,822	干迫遺跡
後期前半	鐘崎式（粗製）	3,961	西畑瀬遺跡
後期前半	辛川式	3,558	干迫遺跡
後期後半	西平式	3,575	干迫遺跡
後期後半	西平式	3,467	釘野千軒遺跡
後期後半	西平式	3,460	釘野千軒遺跡
後期後半	西平式	3,557	下鶴遺跡
後期後半	西平式	3,459	下鶴遺跡
後期後半	西平式	3,455	玉名平野条里跡
後期後半	西平式	3,364	玉名平野条里跡
後期後半	太郎迫式	3,460	西畑瀬遺跡
後期後半	三万田式	3,388	大野遺跡
後期後半	中岳式	3,233	西原遺跡
後期後半	中岳式	3,206	西原遺跡
後期後半	御領式	3,210	西畑瀬遺跡

は活動の場を移動させたことが推察される．下楠田貝塚から北東約８㎞に位置する権現塚北遺跡・坂田中園遺跡からは縄文時代後期後葉以降の遺構・遺物が認められ，両遺跡には貝塚が形成されないことは注目される．縄文時代後期中葉以降，海退によって生じた新たな環境に適応した居住・生業活動が行われるようになったのであろう．こうした自然環境の変化と居住・生業活動の関係性，そして，その居住・生業活動の実態解明については，今後の課題としたい．

５．おわりに

本稿では，九州大学総合研究博物館に所蔵されている玉泉館旧蔵考古資料のうち，福岡県みやま市所在の下楠田貝塚出土土器資料の報告を行った．

採集品という資料の性格上，その評価・位置づけについては可能性の提示に留まらざるを得なかった部分が多い．しかし，下楠田貝塚における人々の活動期間や環境変動との関係，また，土器からうかがえる当時の社会関係・集団関係の広域性・複雑性などは，玉泉館旧蔵資料の存在によってより明確に示されたと考える．たった７点の土器資料であるが，その調査・研究・報告を行った学術的・学史的意義は少なくなかろう．今後は周辺地域の資料群との比較研究を行いながら，研究をさらに深化させていく必要がある．

今回報告した資料は玉泉館旧蔵資料のごく一部にすぎず，まだ日の目を見ない資料は多い．引き続き，玉泉館旧蔵資料の調査・研究，そして，その成果の報告という営みを継続していく必要性と重要性を改めて痛感しつつ，擱筆としたい．

謝辞

本稿をなすにあたり，資料報告の機会を与えていただいた，九州大学総合研究博物館の米元史織氏には感謝申し上げます．また，大野城市教育委員会の林潤也氏と，熊本大学埋蔵文化財調査センターの山野ケン陽次郎氏には，土器資料の位置づけ・評価について多くのご指導をいただいた．末筆ではございますが，御礼申し上げます．

なお本稿は，JSPS 科研費 JP20K13233 の助成を受けたものである．

注

1　玉泉館旧蔵資料の詳細については，玉泉1966・1972，小林1988，谷澤・岩永2021に詳しい．

2　九州大学総合研究博物館データベース（http://db.museum.kyushu-u.ac.jp/jp/）

3　近年，玉泉館旧蔵資料のうち，古代瓦資料を対象とした考古学的・岩相学的研究が実施されている（飯塚・主税2021）．

4　貝層内からは縄文土器片のみが出土したとされている（清野 1969）．

5　九州縄文時代後晩期に出土する石包丁形石器を「石刀」とする場合もあり（賀川1966・1967など），こうした意味で「石刀」という用語を用いた可能性も考えられる．しかし，誤解を招く用語の使用であることは間違いなく，訂正の必要がある．

6　遺跡発掘調査報告書放射性炭素年代測定データベース（https://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/esrd/db_param）

7　海退が進行していたとされる縄文時代中期末～後期前半の間は，海進・海退を繰り返すような，海水準の不安定な状況が続いていたと考えられる．地域は異なるが，千葉県の低地遺跡における成果などから，縄文時代後期前半に海進が生じており，その後，後期中葉以降，海退が進行したことがわかっている（蜂屋2020など）．おそらく九州でも同様の状況であったことが推測されるが，この点に関しては今後の検討が必要である．

参考文献

飯塚義之・主税和賀子 2021「九州大学総合研究博物館所蔵・玉泉館古代瓦資料の岩相学的研究」『九州大学総合研究博物館研究報告』18，pp.15-37.

大牟田市教育委員会（編）1970『荒田比貝塚』大牟田市教育委員会

賀川光夫 1966「縄文時代の農耕」『考古学ジャーナル』2，ニュー・サイエンス社，pp.2-5.

賀川光夫 1967「縄文晩期農耕の一問題 ── いわゆる扁平石器の用途 ──」『考古学研究』13-4，pp.10-17.

九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座 1996「九州大学旧玉泉館収蔵考古資料（1）── 九州縄文時代資料（1）──」『九州文化史研究所紀要』40，九州大学大学院比較社会文化研究科九州文化史資料室，pp.1-86.

九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座 1997「九州大学旧玉泉館収蔵考古資料（2）── 九州石器資料（1）──」『九州文化史研究所紀要』41，九州大学大学院比較社会文化研究科九州文化史資料室，pp.53-128.

九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座 1999「九州大学旧玉泉館収蔵考古資料（3）── 関東縄文時代資料（1）──」『九州文化史研究所紀要』42・43合併号，九州大学大学院比較社会文化研究科九州文化史資料室，pp.1-48.

清野謙次 1969『日本貝塚の研究』岩波書店

久賀愛策 1970「第 1 章　荒田比貝塚の歴史，地理的環境」大牟田市教育委員会（編）1970『荒田比貝塚』大牟田市教育委員会，pp.2-6.

小林茂 1988「教養部玉泉館資料の移転について」『九大教養部報』93，pp.8-12.

柴田常惠 1916「筑後三池郡上楠田の石神山」『人類学雑誌』31-7，pp.231-236.

下山正一 1994「北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向」『第四紀研究』33-5，日本第四紀学会，pp.351-360.

田中良之 1982「磨消縄文土器伝播のプロセス ── 中部九州を中心として ──」『森貞次郎先生古稀記念古文化論集　上巻』，pp.59-96.

谷口康弘 2019『入門縄文時代の考古学』同成社

谷澤亜里・岩永省三 2021「玉泉館旧蔵考古資料 ── 近年の再整理を経ての資料紹介 ──」『九州大学総合研究博物館研究報告』18，pp.51-63.

玉泉大梁 1966「玉泉館の記」『九大教養部報』18，p.3.

玉泉大梁 1972「玉泉館のこと」清陵会（編）『清陵　思い出の記』清陵会，pp.6-11.

長岡信治・横山祐典・中田正夫・前田保夫・奥野淳一・白井克己 1997「有明海南東岸玉名平野の地形発達史と完新世海面変化」『地理学評論』70A-5，日本地理学会，pp.287-306.

中山平次郎 1917「九州に於ける彌生式土器と貝塚土器」『考古学雑誌』8-4，考古学会，pp.19-40.

蜂屋孝之 2020「千葉県の低地遺跡から見た縄文海進と海退以後 ── 市川市道免き谷津遺跡及び雷下遺跡の調査成果から ──」『先史考古学研究』第13号，阿佐ヶ谷先史学研究会，pp.125-158.

林潤也 2020「鐘崎式土器の終焉 ── 東北部九州の様相 ──」『遺跡学研究の地平 ── 吉留秀敏氏追悼論文集 ──』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会，pp.265-276.

福永将大 2016「北久根山式土器の再検討」『九州考古学』91，九州考古学会，pp.1-20.

Received Nov. 8, 2021; accepted Nov. 18, 2021

Study of archaeological materials in the *Gyokusen-kan* Collection

—About pottery materials of Shimokusuda shell mound, Miyama City, Fukuoka Prefecture—

Masahiro FUKUNAGA

The Kyushu University Archaeological Research Office, Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan

This paper reports on the pottery materials excavated from the Shimokusuda shell mound located in Shimokusuda, Miyama City, Fukuoka Prefecture, among the *Gyokusen-kan* Collection in the Kyushu University Museum. Based on the archaeological information clarified from the pottery materials, this paper considers the period of people's activities in the Shimokusuda shell mound and livelihood activities there, focusing on the relationship with climate change in the Jomon period.

Key words: the *Gyokusen-kan* Collection, report of materials, Shimokusuda shell mound, pottery, Jomon period